



多々羅義雄画伯 (1894~1968)
21歳の頃、日暮里のアトリエにて

多々羅義雄の母と兄

竹中正基

本誌創刊号に、能古出身の画家多々羅義雄の生前を語って、谷口治達氏(九州造形短大教授)から澄明な名文をいただきました。多くの方々から感銘と賞讃が寄せられたことを報

告いたします。もうこれ以上の多々羅評はできないと思いますが、ご遺族から寄せられた資料の中に、勉学中の多々羅に宛てた母上と長兄の書簡が十数通あります。八十年の歲月を丁寧保存されてきたわけで、故画伯の誠実な人柄を知ることが出来ます。

次に母「たま」と長兄「光」の書簡を一通ずつ紹介して母と子、兄と弟の当時を偲びたいと思います。

慶応二年生まれの母親の手紙
(大正二年一月二日付)

あけましておめでとう
おバあさんが八十一になられました私

が五十三 光さんが二十三 義雄さん二十

十、一郎十六才のみな

をあなたおばあさんの年

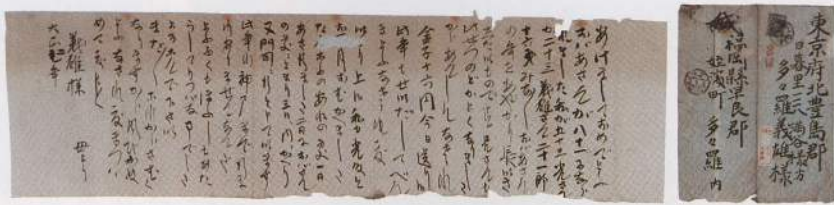
たいものです 兄さん

も此せつ のどが

よくになりましたから

あんしんなされ

金子十六円今日送ります
候
此年もせいだしてべ
んきようなされ度
いのり上候 私も光
殿とお正月をむかへ
ました
たんこうのあねの処
(に)一日あさ行(き)
ました 二日に
おバあさんの処にとまり
三日に内にかへり又門
司(と)申(し)ています
此年わ神戸まで行(く)まわあり



母 たまの手紙 (まき紙 たて17.5cm×よこ65cm)

ませんんだ
ようふくもほうし(帽子)もあた
らしでりっぱな事
でした

よろこんで下さい
まだまだこれからさ
むくなりますから風

(かぜ)ひかぬような
され度 まづはめで
度申し上候

義雄様
大正二年
母より

明治四十三年の上京か
ら三年目になる次男義雄
に宛てた新年の祝詞と毎
月の学資送金の母親の手
紙である。義雄の上京後

は、祖母と母、三男(一
郎)の家庭、これに長兄
の光(門司鉄道管理局庶
務課人事係勤務)が年末

年始の休暇で帰省中の様
子を知らせている。学資

は毎月十六円と決め月始
めに送金しており、時に

義雄からの臨時出費(展
覧会出品のための額縁代、写生旅行

費など)の要望には、そのつど応じ

ている。

正月早々の書留便として福岡姪浜局一月二日の消印と到着局の下谷局(東京) 四日付の消印が封筒に見られる。大正初年の郵便日数としては今日から見ても早い。

一ヶ月の学資十六円の内訳は下宿代六円、学校月謝二円、絵具代五円、本人の小遣い三円として別便でわかる。

後に下宿代ほかの増額で十八円になるが明治四十三年末から大正七年までおよそ十年間毎月のおよそ十ヶ月の送金をつづけた母親もさることながら(父親は早くに死別)兄の光が長男として弟に母を語る手紙など明治、大正、昭和の世代を超えて立派である。この母にしてこの子、この兄、この弟、として他言を要さ

ないと思う。

現在、多々羅義雄の遺作展不室に、画伯がアトリエ内で永年使用した制作用具や日常愛用の品と共に母の書簡二通を掲示しているが、息子の勉強を切願しながら西公園に桜見をしたことを書き添える優しさを見せている。



兄 光像 油彩 F4号
多々羅義雄(1894~1968)



母堂 たま像写真

ましと助言など兄らしい心くばりが見える。

兄の手紙

(大正二年一月二十八日付)

土曜から姪浜へ帰りました。前の日曜は鼻の手術を享けるので帰りませんでした。日曜には大抵いつも帰って母とたのしく談じて慰さめるのを何よりの愉快と思っています。私鼻は其後経過頗るよろしく心気一転したるようにてこれからは次第に丈夫になることと楽しんでいきます。内に帰ってあなたのはがきもみました。相変わらず壮健で何よりです。東京もなかなか寒いそうですね。しかしこの寒いのも今暫くです。すぐに私共の好きなあの気持のよい春がきます。母も至極丈夫です。私もいつも思います。母が殆んど一人で私共をこまめなすには意に一方ならぬ心配



兄 光の手紙 (版野紙 たて22.5cm×よこ36.5cm)

をされたのです。これまで小さい時から何一つ母をよろこばすに足るだけのことをしたことがない私共です。これから充分に孝養を尽さねばなりません。どうぞお互に此点を一時も忘れることなく世の若い多くの人達のように墜落することなく立派(完全)なる人間となり共々に母を慰さめなくてはなりません。いづれ此処に二、三年すれば親子三人一所に暮らすようにするつもりです。私も東京の方に廻わしてもらえばよいのです。内のことは少しも心配することはありません。

暇のとき東京の話や日常の生活の様子(子)などを悉しく手紙にて母上に知らせて下さい。遠く離れておられるあなたのことをよく気にかけてられますから。四月頃の旅行は

どこに行きますか 鈴木伯父の住所は茨城県新治郡石岡町中丁高野方 今春の展覧会には少しは人目を惹くに足る作品が欲しいですな しかしあまり成功をさせるというも失敗のもとです柴田君が上京されたそうですね

ながら御無沙汰していただきますから手紙を出したいので住所をそれからこれは少し無理なお頼みですがね 私が管理局で非常に可愛がられている人で大変画の好きな人があります その人

に上げたいのですがもし暇なとき水彩でも書かれたら二、三枚送って下さいませんか 急ぐことはありません 絵具がないならしかたがありません もし出来たら御願いたします

光
義雄どの

光、義雄、三男(間所一郎・養子)の父・新三郎は、外国航路の事務長であったという。父親のなきあと兄弟たちは母の手一つで育てられた。この日常の手紙の中に誇り高い海人の魂と、能古の自然にはぐくまれた暖かな心情を感じる。

今の博物館

木下淳一

十月十二日、豊かな緑に囲まれた熊本県立博物館で、「楽しく学び、参加する美術館活動」という副題がつけられた九州博物館協議会の研修会がありました。

参加者は館を組織している事務職員や学芸員でした。手もとにその時の記録がありますので、博物館を中心にした私の考えを織り交せて述べさせていただきます。

今、全国に美術館・博物館と称する施設が二千六百とも四千とも存在するそうです。数がはつきりしないのは個人的な場や店舗と兼ねているものが含まれているとしても驚くべき数字です。最近の企業博物館建設ラッシュ、各自自治体の熱心な活動も拍車をかけているようですが、そこに展示保管される物と人間、費用、入館者等のことを考えますと、このエネルギーは尋常ではありません。数字の上では親しまれてきたようですが、一般認識として博物館は、

今もなお、古くさい、カビくさい、暗くて狭いと言われています。「博物館行き」という言葉の使い

方があります。もとは、美術工芸品や資料等の文化遺産について、それらの調査研究の場、または展示の場にふさわしいイメージとして「博物館行きか博物館行きか」というふうに使われてきたのでしようが、現在ではやや皮肉を込めて言っているようです。中にはひどい人がいて、「博物館や職員そのものが博物館行き」などと吹聴しているようです。

たしかに世間のニーズとずれている部分が多いのは事実です。展示物をとって見ても、古くてボロは真からボロですし、また、より古いものに価値があるとすれば、何億年、何十億年も前に作られたそこらへんに転っている石ころを展示すればいいのですから。ボロなどと極端な表現を使いましたが、入館者の心の奥底に響くものがないものを展示しても

楽しいはずがありません。試験勉強の棒暗記に近い価値感が優先した展示になりますと、一部の熱心な研究者を除き、我慢し耐えなければいけない場としてイメージづけられるばかりです。

今までの博物館が、「物を見せてあげよう」という空間でいられたのは、もともと私たちが習うことの好きな民族であるということと、海外の博物館そのものの情報が少なかつたことなどに関係があると思います。最近の若い世代は、「軽く楽しみたい。面倒なことや哲学はしたくない。」という人種が多数をしめています。その価値感がいくと、博物館は重すぎるのでしよう。

この夏、映画館で封切られた「インディ・ジョーンズ最後の聖戦」はシリーズ化される位に人気のあるアメリカ映画です。主人公は考古学者を父に持つ同じく考古学の博士です。冒険活劇ですが、博物館と違い多くの入館者があったようです。

「おもしろく見たい」人々の心を引きつけるものがあるからでしょう。ちなみに博物館や考古学関係の方々には御覧になられたでしょうか。映画の存在も知らなかったでは「博物館行き」の烙印を押されかねません。

何も軽いノリが良い、とは思いませんが、映画館に足を運んだ多くの青少年がイメージする博物館が現実にならなくても取り入れられると「楽しんであげよう博物館」というふうになるでしょう。

若い感覚に疑問を覚えることももある一例ですが、最近の大型都市ホテルで「世界の巨匠版画展」などの題目で催される展示即売会が増えています。

学生やOLが五十万、百万と気軽に買っているようです。

でもその人たちは年に何回ぐらい博物館や美術館に足を運ぶのでしょうか。五百円前後の入館料も出しおぶるのではないかなと思ったりもします。こういった風潮も現実なのです。(良い企画に多くの来館者があるとは限らないのは関係者でなくても実感できるように)

話は変わりますが、ここ数年の考古学ブーム、特に吉野ヶ里遺跡や藤ノ木古墳などの現象を見てみると、人間の「おもかげ」と「過去」を再現する悲しい性と業を感じずにはいられません。

理屈ではなく、見てはならぬもの、厳粛なものがあるはずですが、例え

ば墓あばきに時効はあるでしょうか。

一代前二代前の墓を他人が発掘し公表したら世間はどうか反応するでしょう。弥生時代の甕棺や内部の人骨を展示してある前で、「見られたくないよ。ひどい事するなよ。」という声が聞こえる時があります。古人の作品にしても、例えば窯跡付近の陶磁器片などは作者自身、他人に見せたくなかったものもあるでしょう。

知的なもの、教育的なものとしていろいろな分野を実証していく私た

展示品紹介

●「陶磁硯」について

昔、瓦葺きの職人が、焚き火の燃えさしの先を水でぬらし、これで瓦に符号をつけ、或は一寸した即興の絵を描いた。これが、硯と筆墨の起りである、という。

中国古代理遺蹟の発掘から、よく瓦硯が出る。

代が下がると「陶磁硯」が出土して、瓦から陶、磁への変化がわかるこのことである。以上、いずれも殷周、前漢、後漢という古い時代。唐代になって、いまの石硯になっ

ちは、割り切りのよさと学問の名で守られる勇み足で何かを失なっていくのです。しかし現代人の業を思いつつ、博物館を楽しめる場に工夫していくことこそ大切なかもしれせん。

最近のある研究では、人の乳幼児を目の前にすると、自分の乳幼児体験が無意識に甦ってくるそうです。博物館の展示物を見て、館そのものがなつかしい里帰りの場として、さらに自分の遠い先祖を懐しむような経験をより多くの人に味わっていた



乾漆硯(12×9×1.5cm)と携帯袋

だきたいものです。

小中学校の生徒が来館してメモを取る姿は、微笑ましい風景です。暗記みたいな使い方をするのはなく、展示品の意識を思い自分たちがそれは何をすべきかを考える場であってほしいと願います。成人であればなおさら過去から未来への鑑賞眼をも養ってほしいものです。

勝手なことをいくつか申し上げましたが皆様方の能古博物館に対する一層のご協力を切にお願い申し上げます。

硯材は昔からすべて石であると思ひ込んでいます。

いま、当館には、陶磁硯三点と乾漆硯二点、これに硯屏という硯の前面飾り、水滴などを展示しています。陶硯に高取焼、上野焼各一点がありますが、二点とも江戸期の作で実用されたものとわかります。中国も日本も、後代になって出土した陶硯の形状などたいへん魅力あるものがあり、復古調的な趣好によって、学者文人により陶磁硯が再製されています。これらは、単に実用だけでなく、美術的な文様、形状の工夫が加わり愛玩されたものであるといわれま

す。
いま一つ、携帯のために「乾漆硯」もつくられ、これまた形と文様も美しく、漆細工の特徴がよく活かされています。この二点も江戸時代のものです。

乾漆硯は、軽さもあって織りの良い布袋に入れ「懐中硯」として用いられたものと判断されます。

館では、陶硯、乾漆硯ともに墨をすってみて、その実用に適することを知りました。ただ、石硯に比べると耐久性はどうかと考えられますが、愛用、所持品としては満足されるものと思われまます。

●高取焼細工ものについて
江戸期高取焼、但し本稿では藩窯つまり藩お抱え陶工の作品に限りまます。その作品の床飾り、床置き(単に置物とも)について話します。



硯屏・水滴・円形陶硯(直径12.5cm)



高取焼陶硯(20×13×2.5cm)

高取焼の限られた釉薬とその色調、これに美事な窯変が加わっても、京焼、有田、九谷焼のような派手な色ものはありません。

ただ、高取土は陶土の中で格別薄

高取焼の限られた釉薬とその色調、これに美事な窯変が加わっても、京焼、有田、九谷焼のような派手な色ものはありません。

ただ、高取土は陶土の中で格別薄

づくりに適する特徴があり、こまやかな細工彫りを可能にします。

殿様のお抱えを自認する陶工たちに、献上品或は殿様に賞玩されるものを作りたいとする気持ちは常にあったと思います。生涯、茶陶(茶入、茶碗、水さし類)をつくるだけでは味気なく、暇な時には自分の楽しみとして、手ひねりと彫り細工など試みたと推察されます。

また茶陶類について数奇者の趣向に応じ、技法の進歩となつて、ついに床飾りまでになり「高取は、一に茶入、二に水指、三、四なくて五に置きもの」と床飾りも高取上手をい

われるほどになりました。お抱え陶工(土分と帯刀御免)には誇りがあります。いくらほめられても、作品すべて藩御用以外の求めに尽きません。床置き類もすべて皿山奉行から藩に納められ、とくに上出来ものは、藩主の江戸みやげ、諸侯への献進にされました。また、家臣に殿様の下賜品とされました。これは当博物館に、高取焼が御拝領御目録(大判奉書に御祐筆の風格ある書体)資料として現存、その証明になります。

高取置物の多様な作品、そのデザインは、どうしたかは御来館され現品でご判断を願います。

閨秀 亀井少棨伝(二) 庄野寿人

亀井学と少棨の生いたち

天下政道の根元を朱子学に延用を求めた徳川幕藩体制であるが、もともと中国原典(前号に述べた四書五経)は同一で朱子学と別に学説を建てた代表格に陽明学と古学派がある。

徳川も中期にかかると、この両学派は朱子理論に対抗、その矛盾をつ

いて公然と批判し自説を主張する動きが見え始めた。これは徳川氏があまりに朱子学説を都合主義に利用した「封建制、身分制、世襲制、その他」などで武士の下層と庶民社会のあり方は息が詰まるものがあった。これに対し、個人を主体にする

自然の真理と時代の進行に適応の自由を可能とする両学派の実学性が認識されると、必然的にその抬頭をうながしたといえる。

朱子学が「神君以来、お代々御信用の学」とする口上もゆらぎ出したのである。神君とは、徳川家康のことであることはいうまでもない。

江戸初期に実学と民生を唱えた人物として熊沢蕃山、山鹿素行などがあるが、両者とも幕府の圧迫で挫折させられている。

五代将軍綱吉は、自らの好学もあつ

て学派にとられず学者の登用にも熱心であった。この好期を得て登場したのは古学派の荻生徂徠である。彼は幸いに蕃山、素行の不運をふまなかった。

徂徠が仕えた主君柳沢吉保は、綱吉の寵臣として異例の出世をし、後に大老に昇進する。その間に徂徠は吉保の推挙で將軍綱吉に進講するなど恵まれた境遇と名声を得る。

徂徠は、父の不遇もあって少年期から貧窮の中で刻苦独学して後年の学問基礎をつくった。古学を素地に古文辞学（一般に徂徠学という）を確立して中国古典の正しい究明に努めた。原書の語意を昔にかえって理



少栗菊画 (107×29cm)

解し、朱子学派の誤まった訓解、その教理を不可としたのである。

朱子学に対する古学派の挑戦は、まさに徂徠の古文辞学によって歴然とされる。朱子学の「理先後気」の理論を根本から否定、かつ観念的な道学性を排除。即ち人の心は人身を主宰し、善をなすは心であり、悪をなすもまた心にありとする。従って

教育によって道理を教え、なお従うことを知らない者には法と罰によって悪を防ぐとした。

また人には情意があり、詩情（うたごころ）に托して心気を発揚する、その自由を抑制できないとする。いわゆる徂徠学の「礼楽刑政」と「詩書礼楽」論である。儒学はがんらい政治にかかわる哲学であるが、政治に先行する道徳を重要とする。またすべてを直視してその対処が肝要で、硬直をもって事に当たらないことを説いた。

徂徠の人柄は闊達、なお自らは節度を持し、門弟をよく遇した。中には詩酒風流として飲酒遊興に過ぎる

者があっても徂徠は門下の細行にこだわらなかつた。

徂徠を語る挿話の一つに、赤穂浪士問題がある。初め幕閣は強硬な死罪説であったが、江戸市民の浪士に対する人気が高まるにつれて助命論が有力になった。將軍綱吉も寛典に同意を示したが、徂徠は浪士の面目を考慮して切腹を進言した。

浪士の切腹後、時日がたつにつれて徂徠の不人気も消え、かえって美事な裁断とする評判に変わった。徂徠の屋敷に近い俳人の榎本其角は、「梅が香や隣は荻生総右衛門」と吟じた。徂徠と赤穂浪士の切腹（元禄十六年二月）を、梅花の香りとする季題にとらえた。総右衛門は徂徠の通称である。江戸っ子が、其角の句調に共感したことが、この句を今日に伝えたのであろう。

徂徠は、八代將軍吉宗の代になると再び幕府の信認を得て、中国書の訓点、校正を行い、享保十二年吉宗の諮問を受けるが翌十三年（一七二八）一月に没した。

亀井学は、本篇の主人公少栗の祖父南冥に始まり、その基盤を徂徠の古文辞学におくとされるが、南冥は徂徠没後十五年、寛保三年（一七四三）に出生。さらに南冥が修業に志す時代は、徂徠の直門弟も多く他界し、西国における徂徠の高弟として評判が高かった長州藩儒の山泉周南も南冥十才に亡くなっている。ただ幸いであったのは徂徠の古文辞修得と原書の唐音読解を助けて共に学習した黄巖宗の学僧大潮が佐賀藩鍋島家の支藩蓮池・竜津寺に帰住してあり、南冥（十才）は父聴因の勧め

で大潮に入門を果したことである。大潮は八十才の高齢であったが、なお九十才示寂（高僧の死をいう）までよく子弟を教えた。

大潮の事蹟を広瀬淡窓は自著「儒林評」に次の通り「我が海西九州ノ文学ハ、肥前ノ僧大潮ヨリ開ケタルコト多シ。大潮ハ徂徠ヨリ少キコト十三歳。徂徠ノ弟子ニハ有ラネドモ、其交親シク、学問詩文、徂徠ノ説ニヨリテ修セシ人ナリ。徂徠没後、其余声天下ヲ動カス……」として、大潮を西国筋における徂徠学の貴重な存在と紹介している。このため、長崎に往来する儒者文人は蓮池（現佐賀市）が道筋に当たる便利もあって訪問が多く、これは南冥に得難いものとなった。この中で最善は、古方医永富独嘯庵との出会いであるが、これらの詳細は「亀井南冥伝」として本稿以後の課題とする。

ただ、荻生徂徠によって、朱子学体制に古学、古文辞学が新しい境地を開拓し、その事実の後進者に大きな励ましとなった。しかし根強い朱子学派の反動が、徂徠没後六十年を経て幕府による「寛政異学の禁」となり、その余波は福岡藩に及んで寛政四年（一七九二）南冥の藩儒（西学問所・甘棠館主宰教授）罷免と終

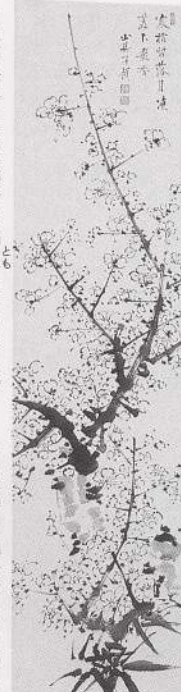
能古博物館だより

身塾居とされた。西学甘棠館は、南冥の高弟で訓導勤役の江上蒼洲を昇格就任させ、少梨父の昭陽が新規召出しを得て訓導職補充となったが、亀井家および亀井学派にとって南冥追放は大きな受難であった。

これからいよいよ「少梨伝」の本題に入るが、少梨誕生にかかわりながら、亀井家と亀井学に次の災難を述べなければならぬ。

寛政十年（一七九八）二月朔日未明（午前二時頃）福岡城下唐人町善龍寺前の商家（蝸ノ屋）武平方からの出火は、折柄の激しい西北風のため唐人町はもとより浪人町、榎木屋町、新大工町、通り丁、杉土手まで延焼を駆け、なお火勢衰えず城濠を越えて城内に迫り、銀奉行役宅を焼失して藩主居館に飛び火が心配されるまでに及んだ。万一を考えて藩主長順は、家老用人ほか奥頭取、納戸頭を従えて城外西南の別荘友泉亭に避難。卯の刻（午前六時）過ぎ鎮火が見えたので藩主の帰館となった。この大火で唐人町に創設されていた藩校西学問所・甘棠館が焼失、隣屋敷の亀井家は火元に近いため家財はもとより、貴重な書籍、父子の著述稿本のすべてを失った。また、出火の時刻と火勢の急激に寮生らも身体

ひとつ逃げるだけで、負傷者がなかったのをせめてとするだけであった。類焼した町筋には、中級以上の藩士住居が多く、いづれも数百―千坪をこえる屋敷を構えた四三家と唐津街道筋の町家一六六戸を焼亡。福岡藩は、この被害を幕府に届出た。亀井家は、当主昭陽の妻「いち」が初産とその臨月であったので正月過ぎに城下を距る5軒の領内早良郡姪浜村の実家「早船家」に里帰りしていた。火災後の二月十九日、少梨は父二十六才、母二十二才の第一子として母生家に出生。命名「友」とされた。



少梨 梅画 (107×29cm)

父昭陽は、当時の社会性もあって男子を念じていたのは当然である。このため少々失望の記録を残しているが、後には彼女の成長につれて「この児が男であれば」と、語らせると、後に昭陽が見せるようになった。昭陽夫妻は四人目に初めて男子を得る。彼女は、長じて少梨を号するが、本稿は雅号の少梨が一般に親しまれているので、これで通すことにする。

長子の少梨は、大世帯を仕切る母の手助けとともに漢字の勉強と習字を父に仕込まれた。とくに昭陽は、父南冥から書道に熱心で、その手本も残っている。少梨の書は亀井様と一見してわかる父祖代々一家の書である。亀井家の生活は、福岡藩の家業士（学問、武芸、医術などの学術技芸を以て代々仕える武士をいう）として家禄十五人扶持（年収米七十五俵）のほか近郊（鳥飼村）の私有田畠による収納一切を親類縁者に付託している。その運用配分があり、つねに二僕二婢（下男と下女各一人）を置き、また生まれる子どもには、みな乳母をつける暮らしであった。昭陽が文政元年（一八一八）から死去前の天保六年（一八三五）までの私的記録「空石日記」（空石は昭陽の別号）によると、少梨母の実家である早船家、その重縁となる石橋家による亀井家経済の信託と赤字補償的な扶助を見ることが出来る。早船家は、五島屋を称する回漕業

と広く海産物を商う旧家で、少梨の曾祖父聴因（南冥の父で医師）が姪浜開業以来の姻戚で父昭陽と母は従妹婚であった。また後に、少梨妹が同家に嫁ぐことになる。石橋家は、紙屋を号し、対岸残ノ島に基地をおく廻船業の本縮で、代々姪浜大庄屋を勤めて藩庁の信認あつく破格の二十人扶持を受ける。酒造業、両替商も営んで藩重臣家の家計を預り、その給付収入も多大であった。少梨母の姉が同家当主に嫁いで早船家との縁故は近い。同家による南冥父子に対する扶助支援は厚く、愛宕山に南冥顕彰碑を残す。

幕府の寛政異学禁による藩の亀井家学に対する圧迫と大火後の亀井家および家塾の再建と経営には、在野文人による支持も見られるが、以上の重縁両家による同族としての直接援助が大きかったのである。これらは本稿以後の南冥、昭陽の各伝に詳細するが、いまは女性ながら少梨生涯には亀井縁家の結束を多分にするものがあつたことを誌しておく。

大火による亀井家罹災の後、昭陽は、まず両親南冥夫妻を祖父聴因の旧居（南冥の末弟大年が医業を開いていた）に移し、さらに火災の跡始末を終えると妻の実家に仮寓する。

早船家は、隠居正朔の離れ家を昭陽一家に明け渡した。これを昭陽は「甘古堂」と名付けてその後も自身の学堂として再三使用した。

少梨母子の肥立ちは順調で、早船家はもとより一族縁者による祝福は賑やかであったと推察される。

昭陽は、城下唐人町の焼跡に住居



少梨彩色菊画 (19×30.5cm)

を再建、西学問所「甘棠館」の学業再開に備えていた。

六月十六日、藩議は西学再建を停止、廃校を決定。同校の儒学教職者全員を平士編入とした。福岡藩の東西両学問所の開設と、これに朱子学、古学の両学派を区分した開校は諸藩

に前例がなく全国に注目される存在であった。しかし、ついに天明四年の開校から十四年四カ月の歴史を終えた。これには多くの記事があるが、この少梨伝では割愛する。

昭陽が火災跡に建てた住居は、翌年の寛政十二年正月九日、これも近火により焼滅。再び昭陽一家は姪浜早船家の甘古堂に移った。

同年七月、昭陽第二女出生。即ち少梨妹の(敬)で、長じて早船家に嫁ぐ。

昭陽は、二度の災火に街中に住むことを断念。郊外の百道松原で樋井川々畔の地を選び、まず父住居の「草ヶ江亭」を建て両親を移した。同地は北に砂丘台地の松原を背に南前面は鳥飼低地をへだてて草ヶ江丘陵を望む。

亀井家譜(萬歴家内年鑑)に「享和元年五月移宅百道」を誌す。即ち昭陽一家の新築家への移転である。少梨四才、此年から習字を始めた。(以下次号)

本号執筆者の紹介

竹中正基

「多々羅義雄の母と兄」(二頁)

助亀陽文庫能古博物館館長

九州造形短期大学非常勤講師

木下淳一

「今の博物館」(三頁)

助亀陽文庫能古博物館学芸員

筑紫女学園短期大学・九州産業大学

・九州造形短期大学非常勤講師

庄野寿人

「閨秀亀井少梨伝」(五頁)

助亀陽文庫理事長

今季の展示品の見どころ

(十二月七日入替)

○第1展示室

古高取 茶道具銘品

高取床飾(置物) ほか

○第2展示室

亀井少梨自題画

鶴、梅花、桜花図

・二川相近賛による

梅花、桜花図など

新春にふさわしい郷土文人画

○第3展示室

多々羅義雄の絵画

油彩

柘榴、花、朝鮮人形、早春風景など3号から6号までの小品7点

スケッチ類

白浜海岸スケッチのクレヨン、マーカーによる作品5点

製作のための下絵2組5点

大正5年房州旅行の時に描いた式

千石船のデッサン2点

構図研究のための習作1点、など

新たな作品を加えて展示します。

編集後記

開館して早くも四ヶ月がすぎました。当館展望室より見る博多湾は、海というには小さく穏やかな風景ですが、刻々とその色合を変えながら、そこに立たれる皆様方を圧倒的に魅了しています。充実した展示内容を心掛けてはいるものの、これには少々嫉妬せざるを得ません。

コスモスの時期はとうに過ぎ、木の葉は色を染めてまいりました。海風の冷たい季節の倒来を予感してはいささかおびえずにおられませんか。でも、それにもまして、この島が秋から冬へと少しずつ景色を移し、その趣ある姿を見せてくれるのではないかと期待しているこの頃です。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
 休館日 毎週月曜(月曜が祝日の場合は次の日)
 12月29日~1月2日
 入館料 大人300円・中高生200円
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)→
 能古(徒歩5分)→博物館
 〒819 福岡市西区能古522-2
 ☎(092) 883-2887・FAX (092) 883-2881